

龍樹造・中論無畏疏 (前續)

寺本婉雅譯

「觀顛倒品」第1 [十] 1 (Viparyāsa-parikṣā)

此に問へ言。

(1) 「貪欲、瞋恚、愚癡の諸は

妄想分別より生ずと説かれたり

淨と不淨との顛倒に

依止して「一切を生ず」

「從憶想分別

「貪・瞋・癡」

生於貪恚癡、

分別を起源とするが故に

淨・不淨顛倒

何となれば(實は)淨と不淨の

皆從衆緣生[○]」

縁りて生ずるが故[○]」

/Beginnde (rāga), Abscheu (avesa), Verblendung (moha) werden als aus Vorstellung (saïkälpa) entstanden dargelegt.

Von den Verkehrtheiten „rein“ und „unrein“ abhängig entstehen sie/ (p. 142)

此に貪慾と瞋恚と愚癡との諸は妄想分別より生ずと經中に廣説せられたり。其等は亦淨と不淨と

の顛倒に能依するより一切を生ずるが故に、それ故に貪欲と瞋恚と愚癡との語は(p. 99a)有るなり。

① 原文 Kun-tu-Rtogs-pa は梵語 Saṅkalpa の翻譯である。Saṅkalpa は根本佛教の八正道中の「正思惟」(Samyakkāsankalpa (Yain-Dag-Pahi Rtogs-pa)) に起因する。此の藏語 Rtogs-pa は巴利語 Khappa、梵語 kalpa の翻譯である外に、尚巴利語 Vitakān、梵語 Vitarkān の翻譯として用ひらる。此の場合には俱舍論に云「尋と伺」(Vitarkan ca vicaranī) の熟語に漢譯され、藏語 Rtogs Dan dPyod.pa は其對譯である。

(1) Vitarka=尋・分別(俱舍論)・分別(唯識川十論)。

(1) Kalpa=investigation,-觀(中論)。

(iii) Vikalpa=Vi+kalpa(Rnan-Rtogs-pa)=妄分別、遍計(三性中隨一)—Unterscheidungen (Walleser 氏 中論)。

(四) Parikalpita(遍詮)=Kun-Tu bRtogs(藏譯 分別中論)。

(五) 獨證—Saṅkalpa (kun-tu-Rtogs-pa)=Vorstellung(觀念・表象・訓誠・説明・概念)

② 般若燈論—「分別起、煩惱、說有、貪瞋等、善不善顛倒、從此緣而起」

中觀釋論—「因=分別、故起、說彼貪瞋癡、善不善顛倒、此等從緣有。」

此處に釋して曰、

(2) 「あらゆる淨と不淨との

顛倒に依止して生ずるものば

//Gai-Dag Sdug Dañ Mi-Sdug-pahi/

/Phin-Ci-Log-La Rten-hByun-Ba/

其等は自性によつてはなし

それ故に煩惱は如實になし。」

〔^②若因淨不淨 「淨、不淨の顛倒に

顛倒生_二毒

縁り_一へ生ずるやうの

三毒即無性

彼等は自性によつて存在せば

故煩惱無_二實

それ故に諸煩惱は如實によつて

taśmāt klecā na tattvah//(p. 453)

/Diejenigen, welche abhängig von der Verkehrtheit des „Reinen“ und „Unreinen“ entstehen,

Existieren nicht an sich (svabhāvataḥ); deshalb sind die Qualen (kleśa) nicht wirklich
(tattvataḥ)/(p. 142)

貪欲と瞋恚と愚癡等は淨と不淨との顛倒に能依して生ずる其等の所有る煩惱は無自性なり。され
故に諸煩惱は如實に有るこんたし。

① 本偈—De-Dag Rañ-bShin-Las Med-De/(其等は自性よつてなむ) Rañ-bShin=prakṛiti(數論の詳説)svabhāva.

② 般若燈論—「愛非愛顛倒、皆從此緣起、我無自體故、煩惱亦無實。」
中觀釋論—「若善不善倒、從緣生_二食等、以_一煩惱無性、故煩惱無_二實。」

(3) 「我の有性と無性とは

如何にしても亦成するこゝなし

心の(我)なしこ諸煩惱の

有性と無性とは如何ぞ成せん。」

「我法有以無

「我の有性と無性とは

是事終不成

如何にしても成せず

無我諸煩惱

その(我を)離れて諸煩惱の

有無亦不^成。」

有情と無性とは如何にして成

Tām vīnā astitva nāstitve

klecānān sidhyataḥ kathain// (p. 453)

/Des Selbstes (ātman) Sein und Nichtsein wird nicht irgendwie erreicht;

Wie wird ohne dieses der Qualen (kleśa) Sein und Nichtsein erreicht?/(p. 142)

此に若し貪欲等の諸煩惱の所依(Rten) & 我(bDag) だらぬ門をも そねに能依する諸煩惱も亦有りと分別するに適當ならば、我の有性(Yod-pa-Ñid)と無性とは何の種類によても亦如何にしても亦成するものなし。かの我なれば、諸煩惱の有性と無性とは如何にして成せるを得ん、不成なり。

① 般若燈論——「我若有若無、是二皆不成、因我有^は煩惱、我無^は彼不起」
中觀釋論——「汝意若離我、謂^は有^は諸煩惱、從^は因縁^は有者、此煩惱悉遮。」

何の故に_{ハルマニ}。

(4) 「其等の煩惱は誰の(やの)なるも

その(誰かは)亦成すること有るゝ事なし

若し誰かなくして何にか有らん

煩惱は少しも有るゝ事なし。」

「誰有^③此煩惱」

「其等の諸煩惱は誰かに屬^{ハシメテ}

是則爲不成_{ハシメテ}

若誰是而有

煩惱則無_{ハシメテ}屬_{ハシメテ}」

誰に_{ハシメテ}屬_{ハシメテ}して存在す。」

/Wessen diese Qualen (kleśa) sind, der auch wird nicht erreicht.

Wenn auch (dieser) irgendwelcher nicht erreicht wird, so existieren nicht irgendwelche Qualen/

(p. 143)

是等の煩惱は誰のやのたぬ事なし。私の我ば亦一切の種類に於て成するゝ事有るゝ事なし。若し如何なる我も亦なくば、煩惱は何ぞ有らんや。煩惱は少しづくも有るゝ事なし。故に、如何にして是

を思惟するに、如何なる我も亦なきに、諸煩惱はありと思惟せば、其を釋すべし。

- ① 本偈——/bGaḥ Med-par-Ni Gaṇ-Gi Yai/ (或ものなくして誰のまゝ亦)。
- ② 本偈——/Ñon-Moīs-pa-Dag Yod-Ma-Yin/ (諸煩惱は有ることなし)。
- ③ 般若燈論——「誰有^二彼煩惱、有義則不^一成、若離^二衆生^一者、煩惱則無^二屬^一。」
中觀釋論——缺。

(5) 「自の身見の如く、諸煩惱は

具煩惱に於て五種になし」

自の身見の如く具煩惱は

煩惱に於て五種になし」[○]

〔如^二身見^一五種
「自身見の如く諸煩惱は

求^一之不可得

惱者に於て五種になし

煩惱於^二垢心^一

自身見の如く惱者は

Svakāya-dṛṣṭivat kliṣṭān
klisṭe santi na pañcadhā/

五求亦不得[○]〕

亦諸煩惱に於て五種になし」[○]

kleceṣv api na pañcadhā// (p. 454)

/Wie bei der Ansicht des eigenen Leibes (svakāya-dṛṣṭi) sind die Qualen (kleśa) am Geqüälten (kliṣṭa) nicht auf fünf Arten,

Wie bei der Ansicht des eigenen Leibes ist der Gequälte nicht in den Qualen auf fünf Arten/ (p. 143)

如何ぞ自の身見は諸(五)蘊に於て五種に(求むるに)有ることなし。是の如く諸煩惱は具煩惱の心に於て五種に(求むるに)有ることなし。如何ぞ(p. 99b)自の身見は諸蘊に於て五種に於て五種になれば如く、具煩惱の心も亦諸煩惱に於て五種に於いて有ることなし。

- ① 般若燈論——「身起_二煩惱見_一、緣於我、我所_一、煩惱與_二染心_一、五求不可得。」
中觀釋論——「有身見煩惱、染者亦不有、五種求悉無、諸蘊亦不有。」

復又

(6) 「淨と不淨の顛倒は

自性よりは有ることなれば

淨と不淨の顛倒に

能依して如何なる煩惱あるや。」

「淨不淨顛倒 「淨、不淨の顛倒に

是則無自性」 自性よりは有らず

云何因此二、 淨、不淨の諸顛倒に

//Sdug Dañ Mi-Sdug Phyin-Ci-Log//

/No-Bo-Ñid-Las Yod-Min-Na//

/Sdug Dañ Mi-Sdug Phyin-Ci-Log//

/bRten-Nas Ñon-Monis Gran-Dag Yin//

//Svabhāvato na vidyante//

çubha-açubha-viparyayāḥ//

Pratītya kataumāñ klecāḥ

而生諸煩惱°」 緑うへ、如何にして諸煩惱も

cubha-a-cubha viparyayān/ (p. 455)

/Wenn die Verkehrtheiten des Reinen und Unreinen nicht an sich (svabhāvataḥ) existieren,

Welche Qualen (klesā) sind dann von den Verkehrtheiten des Reinen und Unreinen abhängig? /

(p. 143)

凡ての時淨と不淨との顛倒が自性に由て有るゝんだ。他の時諸の顛倒は如實に非ず。凡そ彼の不如實が自性に由て有るゝとなし、其等は自性に由て有るゝとなれば、其等に能依して所有る煩惱は生ずんばくへ其等は如何ぞ有るゝを得ん。

① 本偈——/Ran-bShin-Ni Yod-Min-Na/ (血性よりは有るに非^べれば)

② 原文——brten-Nas (詔依し乍)、本偈の梵語 pratiya (依止し乍)。漢譯 因緣°

③ 般若燈論——「愛非愛顛倒、本無_二有_一自體_二、似_一何_二等_一爲_二緣_一、而能起_二煩惱_一。」
中觀釋論——「善不善顛倒、彼皆無_二自體_一、顛倒名_二虛妄_一、觀如來品說。」

此處に問て言、

(7) 「色、聲、味と觸と

香と法との六種は

根本にして食欲、瞋恚^{ムカシ}

龍樹造・中論無畏疏

//gZugs Sgra Ro Dañ Reg-Pa Dañ/

/Dri Dañ Chos-Dag Rnam-Sdug-Ni/

/gShi-Ste hDogs She-Sdān Dañ/

愚癡となりと分別せらる。

/gTi-Mug-^①-gir-Ni Rnam-Par-bRtag/

「色」聲、香、味、觸 「色」聲、香、味、觸と

/Rūpa-çabda-rasa-spraçā

及法爲六種

香と法との六種は

gandha dharmāc ca ṣadvidham/

如是之六種

事物にして貪欲と瞋恚と

Vastu rāgasya dvesasya

是三毒根本。

愚癡となりと分別せらる。

mohasya ca vikalpyate//(p. 456)

/Rūpa (visuelle Erscheinung), Ton (śabda) Geschmack (rasa), Berührung (sparṣa), Geruch (gandha) und Objekt (dharma); sechsfach,

Wird die Grundlage (vastu, tib. gShi) von Begierde, Abscheu und Verblendung angenommen (vorgestellt, vikalpyate)./(p. 143)

色の聲と香と味と觸と法との六種は、貪欲と瞋恚と愚癡との根本なりと分別せられ、此の根本に能依して淨と不淨との顛倒を生じ、淨と不淨の顛倒に能依して貪欲と瞋恚と愚癡とを生ぜ。

- ① 本偈——/gTi-Mug-Ni Yin-par-bRtags/ (愚癡の有りと分別せらる)。
② 般若燈論——「愛非愛爲縁、於物起分別。」

中觀釋論——此四句偈缺。

此處に釋して曰、

(8) 「色、聲、味と觸

香と法とは單獨にして

乾闢婆城の如^{ムカシ}の^ム

陽炎、夢に等^{シムカニハ}」

「色、聲、香、味、觸」

及法體六種 香と法とは單なる

皆空如^{ムカシ}夢^{ムカシ} 乾闢婆城の相^{ムカシ}

如^{ムカシ}乾闢婆城^{ムカシ} 陽炎と夢と等^{シムカニハ}の^{ムカシ}」

marici svapna sainibhāḥ// (p. 457)

/Rūpa, Ton, Geschmack, Berührung, Geruch, dharma sind losgelöst (kevala)

Wie eine Gandharvenstadt, und einer Luftsiegelung (marici) und einem Traume gleich//(p. 144)

① 般若燈論——「如^{ムカシ}乾闢婆城、如^{ムカシ}炎亦如^{ムカシ}夢」

中觀釋論——此四句偈缺。

(9) 「幻化人の如^{ムカシ}の^ム

影像とに似たり、^{ムカシ}れ等に於て

//Sgyu-Mahi Skye-Bu Ita-Bu Dai//

/g⁽¹⁾Zugs-bRñan hDra-Ba De-Dag-La/

龍樹造・中論無畏疏

淨と不淨とは

亦何處にか生ぜん。」

「如^①是六種中 「幻人に似たり

何有淨不淨」

又影像に等しきそれ等に於て
淨と不淨とは

Māyā-purusa kalpesu

猶如幻化人」

何處に存在セズ。

pratibimba sameṣu ca// (p. 458)

//In diesen, die wie ein Zauberwesen (māyāpurusa) und einen Reflexe gleich sind.

Woher sollten Reines und Unreines auch entstehen?//(p. 144)

色^②聲と香と味と觸と法とは單獨を離れ、何^も亦無^し。無雜、無自性にして、乾闢婆城の如く、
陽炎と夢とに似たるが故に、幻化人の如く、影像に等しき、それ等に於て淨と不淨とは何處にか生
ずるを得ん。

① 原文——gZugs-bRūṇ(影像)は梵語pratibimba(影像)の對譯なり。漢譯鏡像は當らず。

② 般若燈論——「若愛若非愛、何處當可得、猶如幻化人我、亦如鏡中像。」
中觀釋論——「善不善等法、當云何可得、如乾闢婆城、如燄亦如夢。」

/Sdug-pa Dañ-Ni Mi-Sdug-pa/

/ḥByun-Baṛ Yai-Ni Ga-La-hGyur//

//Açubhain vā çubhain vāpi

復又

(10) ① 何に縁りて淨々

不淨とは假設せらるべ。

淨に觀待せずして(不淨)おもれるが如に

それ故に淨は認むべか^{ムカシテ}。」(p.100a)

「不^②因^{ムカシ}於淨相」

〔淨に觀待せずして不淨は存セ

則無有不淨」

その不淨に縁りて

因^{ムカシ}淨有不淨」

我等は淨を施設す

是故無不淨^{ムカシテ}」

やれ故に淨は實に不可得な^{ムカシテ}」

/Da das Reine, von dem abhängig Unreines als Unreines wahrzunehmen ist,

Olne Beziehung (Hinsicht, anapeksya) nicht existiert, deshalb ist Reines nicht angängig.// (p.144)

淨は何に能依して淨と不淨とを假設せらるべ、かの淨は不淨に觀待せらるべ前に於て有^{ムカシテ}るが故に、それ故に淨は認むべか^{ムカシテ}。

① 本疏偈——/Gaū-Rten-Nas Mi-Sdug-pa/ (何に依止して不淨^{ムカシテ})◦

/Mi-Sdug-par-Ni gDags-Bya-Ba/ (不淨^{ムカシテ}を假施らるべ) 今は本偈に據りて改譯した。

② 般若燈論——「若不_二因_一彼愛、則無_二有_一不愛、因_一愛有_二不愛、是故無_二有_一愛。」中觀釋論——「若不_二因_一不善、善即無_二施設、以_一因_二不善故、善亦無_二所有_一。」

③ 原文 bItos は梵語 apeksya (觀待・因待) の對譯なり。

漢譯因。獨譯 Beziehung (關係)。

(11) 「何に能依して不淨と

淨とを施設せらるゝ也

不淨に觀待せらして(淨)有ることなきが故に

それ故に不淨は認むべからず。

「不_二因_一於不淨」 「不淨に觀待せらるゝ

則亦無_二有_一淨

淨は存せず

因_二不_一淨_二有_一淨

設す(淨に)縁りて不淨を施

是故無_二有_一淨。」 の故に不淨は實に存せら。

yat pratitya açubhaṇa naiva vidyate// (p. 459)

//Gam-Ta bRten-Nas Mi-Sdug-Par/
/Sdug-Pa Shes-Ni gDags Byas-Ba/
/Mi-Sdug Ma-bItos Yod-Min-Pas/
/De-Phyir Mi-Sdug hThad-Ma-Yin//
//Anaapeksya-açubhaṇa nāsti
cubhaṇ prajñapayemahi/

/Da das Unreine, von dem abhängig (pratitya) Reines als Reines wahrzunehmen ist,

Ohne Beziehung nicht existiert, deshalb ist Unreines nicht angängig. / (p. 144)

不淨は何に能依して淨と不淨を施設せらるゝ也。不淨に觀待せらる前に於て有るゝことなれば故

に、それ故に不淨ば詔ひ、心のうつゆ。

- ① 本疏——Sdug-pa-Ni(第 2)は本偈 Mi-Sdug-par(不淨 2)に據りて改訂す。
- ② 本偈——gDags-par Bpa-Ba Sdug-pa-Ni(施設 や る 、 も 淨 2)。
- ③ 般若燈論——「無_二不愛待_一愛、無_二愛待_一不愛、若以_一愛爲_一縁、施設有_二不愛_一」₁中觀釋論——「若不_一因_二於_一善₁、不善無_二施設_一、以_一因_二於_一善₁故、不善無_二所有_一」₂」
- ④ 本疏——Sdug-pa Gaṇ Sdug-par 2, Sdug-pa Daṇ Gaṇ Mi-Sdug-par 2 あらわ。

(12) 「淨有ることなれば

何處にか貪欲は生せん

不淨有ることなれば

何處にか瞋恚は生せん[○]

「若無^②有^二淨者₁

〔淨があらわるに於₁〕

何由而有^二貪

〔何處にか貪はあらわるに於₁〕

若無^二有^二不淨₁

〔而も不淨があらわるに於₁〕

何由而有^二恚[○]

〔何處にか恚はあらわる[○]〕

/Wenn Reines nicht existiert, woher wird Begierde (rāga) entstehen?

Wenn Unreines nicht existiert, woher wird Abscheu (dvesa) entstehen? (p. 145)

淨と不淨との其等は有ることなれば、貪欲と瞋恚とは何處にか生せん。無の故に愚癡も亦なし、其等なきのみに由て、そば我有ることなれを成す。

- ① 本偈——/hDod-Chags Yod-par Ga-la (貪欲有るべくは何處にならん)
② 般若燈論——「無^二可愛者^一、何處當^二起^一貪、不愛若無體、何處當^二起^一瞋。」
中觀釋論——「此若無^二有^一善、當^二云何有^一貪、又若無^二不善^一、云何當^二有^一瞋。」

此に問て言、

淨と不淨との顛倒に有るのみたり。經中には、常等の回の顛倒ありと説き給ひしが故なり。それ等有るが故に顛倒となることも亦あるなり。そゝに誰も無常を常なりとのがの能執は顛倒なるか故に。誰も無常を常なりとのかの能執に顛倒に非す、諸の餘に於ても亦是の如し。

此處に釋して言、

(13) 「若し無常を常なりと「Kṣay

是の如き能執に顛倒ならん

空に於ては常ある」となあが故に

如何ぞ能執は顛倒ならんむ。」

//Gal-Te Mi-Rtag Rtag-Pa-Shes/

/De-Itar hDsin-Pa Log Yin-Na/

/Ston-la Rtag-pa Yod Min-Pas/

/hDsin-Pa Ji-Tar Log-Ma-Yin/

「於^ニ_ニ無常著常

「無常に於て常なり」

// Anitye nityam ity evain

是則名顛倒

是の如^ク能執は顛倒しておらば

yadi grāho viparyayah/

空中無有^ニ常

空に於て無常有らざれば

Na-anityam vidyate cūnye

何處有^ニ常倒^ニ」

如何ぞ能執は顛倒ならんか

kuto grāho viparyayah// (p.46o)

/Wenn die Auffassung des Nichbewigen als „ewig“ verkehrt ist,

Wie ist, da im Leeren Ewiges nicht existiert, die Auffassung (grāha) nicht verkehrt? // (p.145)
若し無常を常なりといふ、是の如^ク能執は顛倒なりと思惟せば、それを釋すべからず。自性空に
於て少しの無常も亦あらざるが故に、其れなくば、是の如^ク能執は如何ぞ顛倒ならん、そは亦顛
倒なり、諸の餘に於ても亦是の如^シ。

① 本偈——/Stoī-la Mi-Rtag Yod Min-pas/ (剝に於て不常あらざるが故ニ)

② 般若燈論——「於第一義中、畢竟無^ニ顛倒、如來終不說、是我無我等。」
中觀釋論——「若無常謂常、此執顛倒者、空中無^ニ無常、何有^ニ顛倒執。」

(14) 「若し無常を無常なりと

//Gal-Te Mi-Rtag Mi-Rtag-Go Ces/
②

是の如^ク能執は顛倒ならずば
空に於て無常あらざるが故に

如何ぞ能執は顛倒な^{ムカシ}。

/hDsin-Pa Ji-Ltar Log-Ma-Yin/

「若於^③無常中」 「無常に於て常な^{ムカシ}」

//Anitye nityam ity evam

著^{ムカシ}無常^{ムカシ}非^{ムカシ}倒^{ムカシ}

若し是の如き能執なる顛倒わ
るならば

yadi grāho viparyayah/

空中無^{ムカシ}無常^{ムカシ}

無常と^{ムカシ}能執^{ムカシ}

Anityam ity api grāhal

何有^{ムカシ}顛倒^{ムカシ}。

空に於て如何にして顛倒な^{ムカシ}

cūnye kim na viparyayah// (P. 462)

/Wenn die Erfassung des Nichtewigen als „nicht-ewig“ verkehrtheit ist,

Wie ist, da im Leeren Nichtewiges nicht existiert, die Erfassung nicht verkehrt?/(P.145)

(P. 100b.) 若し無常を無常なりとは是の如^{ムカシ}能執は顛倒に非すと思惟せば、其を釋すゞし。

自性空に於て少しの無常も亦有るゝに^{ムカシ}が故に、其れなくば、是の如^{ムカシ}能執は如何ぞ顛倒ならぬ。
ぬ。ふは亦顛倒なり、諸餘に於ても亦是の如し。

① 本偈——/Gal-Te Mi-Rtag Rtag-Go Sher/ (若し不常を常なりム)

/De-Ltar hDsin-pa Log-Yin-Na/ (是の如^{ムカシ}能執は顛倒ならば)

/Ston-La Mi-Rtag-pa-ho She/ (是に於て不常なりト)

/hDsin-pahan JI-Ltar Log-Ma-Yin/ (或は能執は如何ぞ顛倒ならぬ)

② 原文——Log-Min-Na (顛倒なら^{ムカシ})、梵語「顛倒なるならば」、獨譯「顛倒ならば」と^{ムカシ}。

③ 般若燈論——「無常謂^{ムカシ}常者、名爲^{ムカシ}顛倒執^{ムカシ}、無常亦是執^{ムカシ}、空何故非執^{ムカシ}。」

此處に問て言、

能執は有るのみなり、やが能執(hDsin-par Byed-pa) も執釋(hDsin-pa-Po) も既釋(gZui-Ba) も既り
が故なり。

此に釋して曰、

(15) 「誰に由ての能執と彼の能執と

執者と彼の所執との

一切は寂靜なり

々れ故に能執は有るゝもなし。」

「可著著者著
〔雜に由て能執ひ がの執と

及所用者法 能執者と がの所執との

是皆寂滅相 一切は寂靜なり

「何而有著」 々れ故に執は有るゝもなし。

/Wodurch (er) erfaßt, was erfaßt (grāha), der Erfasser, und was erfaßt ist,

Alle sind beruhigt (upāśanta); deshalb existiert nicht Erfassen./ (p. 146)

誰に由ての能執も能作となるが故なり。あらゆる能執は物となり、あらゆる執者は能作者となり、かの所執は業となるなり。其等一切は寂靜なりとは自性中に寂靜なり。其等は如何に自性中に寂靜なる如きは、「觀如來品」に於て廣説し盡せしが故に、それ故に能執あることなし。

① 語原 hDzin (能執) = 楚 Graha. 漢譯著。

② 語原 gZuir-Ba (所執) = 楚 Grāhya, Grīhyate (執持されたるもの)。

③ 語原 hDzin-pa Po (執者) = 楚 grahita. 漢譯「著者」。

④ 般若燈論——「執具起執者、及所執境界、一切寂滅相、是故無有執。」

中觀釋論——「能執業用境、此等自性空、皆是寂滅相、是故無有執。」

⑤ 本疏——hDzin-pa Gañ-Yin-pa-Ni dÑos-po (あらゆる能執は物) = 楚 語 Yena grīhṇati (以て執するもの) = 漢譯所用著法。

此處に問言、

諸顛倒は有ることのみにして、其れを有するものあるが故なり。

(16) 「邪若は正に於て

能執あることなくば

誰に顛倒あり

誰に不顛倒あり耶。」

//Log-pa-Ham Yai-Dag-Ñid-Du-Ni//

/hDzin-Pa Yod-pa Ma-Yin-Na/

/Gañ-La Phyin-Ci-Log Yod-Cin/

Gañ-La Ma-Phyin-Ci-Log Yod//

〔^②若無有著法〕 「邪若は正に」 //Avidyamāne grāhe ca

言邪是顛倒 能執の無_{ムカニ}

言正不顛倒 何者に付て顛倒あり

Bhaved viparyayāḥ kasya

誰有_ム如_ム是事_ヲ 何者に付て不顛倒ありや」

bhavet kasya-aviparyayāḥ / (p. 466)

/Wenn weder falsches noch wahrhaftiges (samyak) Erfassen existiert,

Wessen ist Verkehrtheit? wessen ist Nicht-Verkehrtheit? / (p. 46)

是の如く顛倒者は不顛倒に於て彼の能執ある。」^③誰に顛倒あり、誰に不顛倒ありも、無分別の知行に住するものに於ては、常と不常等に於ける智は一切に生ぜざるが故なり。

① 本文——Grāhī 楚 kasya (誰)の對譯なり。

② 般若燈論——「執性無_ム有_ム故、邪正等亦無、誰今是顛倒、誰是非_ム顛倒。」

中觀釋論——「執性無_ム有_ム故、何言_ム邪與_ム正、計_ム無常等法、而成_ム於顛倒。」

③ 獨譯——Reinem und Unreinem (淨と不淨)は誤りなり。

復又

(17) 「顛倒せるものに於て

顛倒等は有らす、

龍樹造・中論無畏疏

//Phyin-Ci-Log-Tu ēyur-Pa-Ta/

/Phyin-Ci-Log-Dag Mi-Srid-Do/

顛倒せらるるものに於て

顛倒ば有らる。

/Phyin-Ci-Log-Tu Ma-Cgyur-La/

/Phyin-Ci-Log-Dag Mi-Srid-Do//

「有^①倒不生倒」

「顛倒せらるものに付て」

//Na cāpi viparītasya

無倒不生倒

顛倒は起らず

sainbhāranti viparyayāḥ/

倒者不生倒

顛倒せらるるものに付て

Na cāpy aviparītasya/

不顛亦不倒。」

顛倒は起らず

sainbhavanti viparyayāḥ// (p.467)

/Bei dem Verkehrten sind Verkehrtheiten nicht möglich.

Bei dem Nichtverkehrten sind Verkehrtheiten nicht möglich./ (p. 146)

① 般若燈論——「正起者無令、未起亦無令、離_二未倒者、有_二合待、不然。」

中觀釋論——「無_二未生顛倒、及世生_二顛倒、亦_二非顛倒時、存_二顛倒生起。」

(18) 「顛倒しひへあらゆるのに於て

//Phyin-Ci-Log-Tu hGyur-bShin-La/
/Phyin-Ci-Log-Dag Mi-Srid-Do/

「若於^①顛倒時、「顛倒しひへあらゆるに於て

//Na viparyasya mānasya

亦不_二生_二顛倒。」顛倒は起らず」

sainbhavanti viparyayāḥ/

/Bei dem (jetzt) verkehrt werden den sind Verkehrtheiten nicht möglich./ (p.146)

顛倒せるゆのに於て顛倒は有らず。顛倒やるゆのに於てもかた有らず。顛倒しつゝあるものに於ても亦有らず。如何にしてかの(顛倒)あらゆるゆのへ如れば「觀已去・未去・去法品」に於て廣説せし如く了解すべめなり。

(18) 「誰に顛倒あり耶

自からに由て觀察せよ。」

「汝可^②自觀察」 「(汝)自から觀察せよ

誰生_二於顛倒_一。」 何ものに付て顛倒起るや。」

sambhanti viparyayāḥ/(p.467)

Bei wen Verkehrtheiten möglich sind, überlege (untersuche) selbst! (p. 147)

今誰に顛倒あり耶、自らに由て觀察せよ。

①② 般若燈論——缺。

中觀釋論——「夫生當之何、有顛倒可得、顛倒若不生、何處有顛倒。」

復文

(19) 「諸顛倒が生せられば

龍樹造・中論無畏疏

//Phyin-Ci-Log-Rnam Ma-Skyes-Na/

如何にして(顛倒は)有りうるか

諸顛倒が生ずる」となくば

顛倒者は何處にか有らん。」

「諸顛倒不生

「不生な顛倒は

「何有此義」

如實にして實に起つべき

無_ア有_ア顛倒故

顛倒が不生なるとか

何有_ア顛倒者_ア」

顛倒に行けるものは何處にか
あらざる。

viparyayesv ajāteṣu

viparyaya-gataḥ kutalḥ/(p.468)

/Wenn Verkehrtheiten nicht entstanden sind, woher ist ein mit Verkehrtheiten Behafteter?/(p. 147)

あらざる顛倒は自性より生ぜず、其等は如何にして有り得べく。今かの諸顛倒は自性より生ぜる
いへば、顛倒者は何處にか有らん。され故に諸顛倒は有るのみなり。其を具するものあるが故
なりとの彼の何れの説も正しからず。

① 本文——Ji-Lta-Bur 並 梵語 kathain (如何にして)の對譯なつ。

② 般若燈論——「無起_ア未起者、_ア何有_ア顛倒_ア、諸倒悉無生、何處起_ア顛倒_ア」
中觀釋論——「若常_ア樂_ア我_ア淨_ア、此四是有者、彼常_ア樂_ア我_ア淨_ア、是即非_ア顛倒_ア」

⁽¹⁾/Ji-Lta-Bur-Na Yod-Par-hGyr/

/Phyin-Ci-Log-Rnams Skye-Med-Na/

/Phyin-Ci-Log-Can Ga-La-Yod/

//Anutpannāḥ kathain nāma

bhavīṣyanti viparyayāḥ/(p.467)

復又

(20) 「若し我と淨と

常と樂とがあらば

我智、淨智、常智と

樂智とは顛倒に非ず。」

「我若常樂淨

「若し我と淨と

而是實有者

常と樂とがあらば

是常樂我淨

我と淨と常と

則非是顛倒。」

樂と世間離りぬべや。」

sukhām ca cūci nityām ca
Ātmā ca cūci nityām ca

/Rtag Daiñ bDe-Ba Yod-Na-Ni/
/bDag-Çes Sdug-Çes Rtag-Çes Dai/
/bDe-Çes Phyin-Ci-Log Ma-Yin/
//Ātmā ca cūci nityām ca

/Wenn Selbst (ātman), Reines (śuci), Ewiges (nitya), Freude (sukha) existieren,
So sind die Vorstellungen (tiib. çes, jñāna) von Selbst, Reinem, Ewigen und Freude nicht
Verkehrtheiten. / (p. 147)

若し我と淨と常と樂とあらば其等の四あらば、其等は「有」の故に、我智と淨智と常智と樂智との
其等は顛倒にあらばなり、心に是を思惟するに我と淨と常と樂との智とはるゝ其等の四は存
在する。無我等の其等の四は有るなり。其等は顛倒を能執するが故に顛倒ありと思惟せば、此

處に釋ヤミシ。

① 本偈——/Gal-Te bDag-Dai gTsān-Ba Dai/ (若し我と淨も)

/Rtag Dai bDe-Ba Yod-Na-Ni/ (常と樂もあら^レ)

/bDag Dai gTsān Dai Rtag-pa Dai/ (我と淨と常も)

/bDe-Ba Phyin-Ci-Log Ma-Yin// (樂もは顛倒に非^レ)

② 中觀釋論——「若常樂我淨、此因是無者、彼無常苦等、是即應不有。」

(21) 「若し我と淨と

常と樂とがなく^レ

無我、無淨、無常

苦とは有る^レま^レな^レ」

「若我常樂淨

「若し我と淨と

而實無^レ有者

常と樂とがなく^レま^レな^レ

無常、苦、不淨

無我と無淨と無常^レ

是則亦應無^レ」

而^レ又苦り^レ決して存在^レ

/Wenn Selbst, Reines, Ewiges, Freude nicht existieren,

/Gal-Te bDag Dai ⁽¹⁾Sdug-Pa Dai/

/Rtag Dai bDe-ba Med-Pa-Ni/

/bDag-Med ⁽²⁾Mi-Sdug Mi-Rtag Dai/

/Sdug-bSial Yod-Pa Ma-Yin-No//

//Na-ātma ca cuci nityain ca

.sukhain ca yadi vidyate/

anātmā'cucy anityain ca

naiva duḥkhaia ca vidyate//(p. 469)

So existieren nicht Nicht-selbst, Nicht-reines, Nicht-ewiges, Leid/(p. 147)

若し我と淨と常と樂と_ハくる其等の四がなへど、其等なればが故に、無我と不淨と不常と苦とする其等の四も亦有るゝとなし、觀待なればが故なり。それ故に此の因の差別(p. 101b)に由てても亦諸顛倒あるゝとなし。

① 本偈—gTsan-ba (cuci淨)。

② Ma-gTsan-Ba (acuci 不淨)。

③ 中觀釋論—「若顛倒法滅、如是無明滅、以無明滅故、諸行等滅。」

(22) 「是の如く顛倒滅するが故に

不明は滅すべし

不明は滅するるかば

行等は滅すべし。」

「如是顛倒滅　　「是の如く顛倒が滅すが故に

無明則亦滅　　不明は滅すべし

以無明滅故　　不明の滅するるかば

諸行等亦滅。」　　行等に滅すべし」

/Da so die Verkehrltheiten zerstört sind, wird Nichtwissen (*avidyā*) zerstört; (p. 147)

Wenn Nichtwissen zerstört ist, werden die Gestaltungen (*sañskāra*) zerstört/(p. 148)

是の如く此の道に由て諸顛倒は滅す、顛倒滅するが故に不^(③)明(無)は滅す、不明滅するが故に、行等の義は滅すべし

① 語原 *Ma-Rig-pa* (不明)は梵語 *Avidyā* (無明)の對譯なり。古來より此 *Avidyā* を「無明」と漢譯せしが故に十二縁起に於て「無明」の元首的位置に就て、無始無明論の無因有果の邪説となり、有始無明の盲目的意志説は解脱の不可能説となりて、諍論の決定することなくして今日に至つた。然るに西藏語では否定副詞の *lo* やは否定詞 *Ma* (不)を *Rig-pa* (明)の前頭に添接し、虛無の意を詮ばすと *Ma+Rig-pa* (無明)を *Rig-pa* の後に添接するを法則 *lo+to* 故に *A+vidyā* (不明) = *Ma-Rig-pa* (不明)。 *Na+vidyā* (無明) = *Rig-pa-Med* (無明)なりとす。阿含經曰「無明滅有^o明」。

② 般若燈論——「以^o彼無因^o故、則無明行滅、乃至生老死、是等同皆滅。」

中觀釋論——「有^o何法可^o斷、此中云何斷、若實有^o自性、自體無^o繫屬^o。」

③ 漢譯——「十二因縁の根本無明滅す、無明滅するが故に三種の行業乃至老死等皆滅す。」

(23) 「若し或る煩惱も

あらゆる自性(に由て)有るならば

如何にして斷ずるか

//Gal-Te La-Lahi Non-Mois-Pa/

/Gain-Dag ^①No-Bo-Nid Yod-Na/

/Ji-Ita-Bur-Na Spoi-Bar-hGyur/

有らば誰が斷やしむる^ア」

/Yod-Pa Su-Shig Spoi-Bar-Byed/

「若^②煩惱性實

「若し如何なる諸煩惱も

/JYadi bhūtaḥ svabhāvena

而有所屬者

自性に由て有りて誰かに屬す
るならば

klecāḥ kecid dhi kasyacit/

云何當可^シ斷

如何にして斷せられ

Kathān nāma prahiyeran

誰能斷^シ其^ノ性^ヲ

誰が自性を斷^シする^ア」

kaḥ svabhāvau prahāsyati//(p.471)

/Wenn irgendwessen irgendwelche Qualen (kleśa) durch Eigensein (svabhāvav) existierten,

Wie würden sie aufgegeben werden? Wer wird Existenz (til. Yod-pa, kār., „svabhrāva“) auf-
geben?/(p. 148)

若し或る諸煩惱は自性に由てなし、而して如實(samyak) ^ム眞性(tattvataḥ, De-Kho-Na) ^ム諸(satya-at-taḥ) ^ムならぬ。それ等は如何にして断せられん。(自性)有らば誰が斷^シする^ア。斷^シせ認ぬ^シか^ムるが故なり。此處に是れを思惟するに、諸煩惱は自性に由て無なり、自性に由て無なる其等を断^シしと思惟せば、其れを釋すべし。

① 本偶——Raṇ-bShin (prakṛiti, 本性)

② 般若燈論——「若人諸煩惱、有^シ自實體、^シ何能斷除、誰能斷^シ有體^ヲ」

(24) 「若し或る煩惱も

あらゆる自性なれば

如何にして斷やくべ

無は誰か斷せしむるべ」

「若煩惱虛妄

「如何なる諸煩惱か

無性、無屬者

「若し自性に由て有らば、して誰かに屬するならば、誰

云何當可斷

(そば) 如何にして断やくべ

Khathau nāma prahyera

誰能屬無性」

「誰か非有を断やくべ」

ko'sadphāvām prahāsyati」 (p. 471)

/Wenn irgendwelche Qualen irgendwessen ihrem Eigensein nach nicht existieren,

Wie würden sie aufgegeben werden? Wer wird Nichtsein aufgeben? (p. 148)

若し或る煩惱は自性に由てなし、而して如實の眞性も歸ふに非やう。其等は如何にして断やくべ

及ぶ。無は誰か断やしむるべ。断は認むぐかうるが故に、修禪者(dhyānin, bSam-gTan-pa)の頭蓋の如し。

① 本偶——Rañ-bShin-Gyis Med-pa(本性に由てなし)。

② 般若燈論及び中觀釋論に缺。

阿闍梨耶・聖龍樹に由て造られたる「根本中道無畏疏」内、「顛倒を觀す」と名けられて、第11十11品な。 (Slob-dPon hPhags-Pa Klu-Sgrub-Kyis mDsad-pa dBu-Mahi Rtsa-Bahi hGrel-Pa Ga-Las hJigs-Med-Las, Phyin-Ci-Log bRtag-pa Shes-Bya-Ba-Ste, Rab-Tu-Byed-Pa Ni-Cu gSum-Paho)